第二十五回

條風會

喜多流能楽
Jo-fu-kai

平成二十九年二月二十五日(土)　午後十二時三十分始(開場午前十一時三十分)　十四世六平太記念能楽堂

時をかさね　あらたに　たち起こる風

能	小塩	内田成信
狂言	磁石	野村万蔵
能	烏頭	狩野了一

次回予告

平成29年9月9日(土)

能	野宮	友枝雄人
能	国栖	金子敬一郎

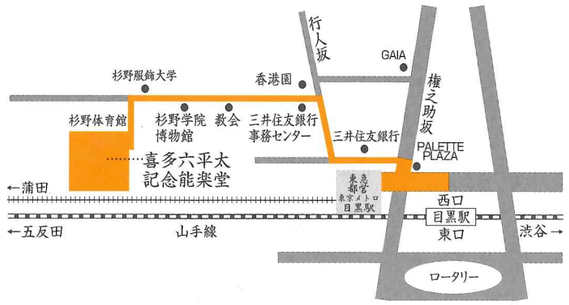
チケットのお申し込みは

- ◆一般6,000円(前売り5,000円)
- ◆学生4,000円(前売り3,000円)
- ◆座席指定券――――2,000円

お申込み・お問合せ先

喜多能楽堂 Tel ―― 03(3491)8813
狩野　了一 Tel Fax 03(3301)9788
友枝　雄人 Tel Fax 03(5950)4543
内田　成信 Tel Fax 03(3721)3311
金子敬一郎 Tel Fax 048(432)6620
E-Mail ―――― ticket@jo-hu.net
Web ―――― http://jo-hu.net/
チケットぴあ―― http://t.pia.jp/
Pコード:455616

十四世喜多六平太記念能楽堂
〒141-0021 東京都品川区上大崎 4-6-9



JR 線、東急目黒線、都営三田線、営団南北線ともに目黒駅下車、徒歩 7 分

※当能楽堂には駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮願います

※許可無き写真撮影・録画・録音等は固くお断りいたします

番組

巻絹

仕舞　友枝雄人

難波

金子敬一郎

地謡　佐藤寛泰　友枝真也　大島輝久　塩津圭介

能　小塩

後シテ・在原業平の霊　前シテ・樵翁　内田成信

ワキ連・都の人　矢野昌平
ワキ・都の人　福王和幸
ワキ連・都の人　村瀬提

大鼓　國川純　太鼓　小寺真佐人
小鼓　曾和正博　笛　松田弘之

アイ・大原の里人　河野佑紀

後見　内田安信　粟谷浩之

地謡　佐藤陽　大島輝久　友枝雄人　友枝昭世　中村邦生　香川靖嗣　大村定

狂言　磁石

シテ・すっぱ　野村万蔵

アド・田舎者　野村万之丞
小アド・宿屋　能村晶人

休憩　二十分

仕舞　籏　塩津哲生

地謡　谷友矩　金子敬一郎　友枝雄人　佐藤寛泰

能　烏頭

シテ連・猟師の妻　佐々木多門
子方・猟師の子　内田利成

後シテ・猟師の霊　前シテ・老人　狩野了一

ワキ・旅僧　宝生欣哉

アイ・外の濱の浦人　上杉啓太

大鼓　亀井広忠　小鼓　観世新九郎　笛　一噌隆之

後見　塩津哲生　佐藤寛泰

地謡　谷友矩　粟谷充雄　金子敬一郎　粟谷能夫　塩津圭介　粟谷明生　長島茂　出雲康雅

終了予定　午後四時頃

小塩（おしお）

都下京辺に居住する人達が、今を盛りに咲いている桜を見ようと、大原山の小塩の辺りに出向きます。すると群衆の中に、桜の枝をかざし、華やいだ風情の老翁があらわれます。これを面白く思った花見の客がいかなる人かと尋ねると、「大原や小塩の山もきょうこそは神代の事も思い出ずらめ」など古歌を口ずさみつつ歌の心など語り、自分の正体をほのめかして、夕霞の影に消え失せます。その夜、人々が花の陰に仮寝すると、夢中に在りし日の麗しい姿で在原業平が花見車に乗って現れます。業平は「月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつは元のみにして」などの『伊勢物語』の歌を引きながら、女たちとの恋愛模様を回想しつつ優美に舞を舞い、やがて花吹雪の中へと消えていきます。

この能では、『杜若』や『雲林院』と同様、業平と二条后との恋物語が語られますが、主眼はむしろ、咲きほこる桜花の爛漫たる風情を出すことに置かれています。全編に『伊勢物語』の歌がちりばめられ、豊かな香気をたたえています。

磁石（じしゃく）

田舎者が都詣での途中、見物をしているとすっぱ（詐欺師）が近づいてきて、自分が都を案内してやるといい、田舎者は丸め込まれて宿屋まで連れて行かれます。

すっぱは宿屋の主人と人身売買の話をまとめますが、それを聞いた田舎者は翌朝先回りをして宿の主人を騙して金を受け取り逃げます。それに気がついたすっぱは、宿屋の主人に刀を借りて田舎者を追いかける。田舎者を捉えて、刀を振り上げると田舎者は、大口を開けて刀を飲もうとする。田舎者は自分は、磁石の精であると言い出し・・・。

烏頭（うとう）

諸国を巡る僧が、陸奥・外の浜へ行く途中、越中・立山に立ち寄ります。そこに一人の老人が現れ、昨年亡くなった外の浜の猟師の亡霊であると名乗ります。老人は外の浜に着いたら、自分の妻と子の家へ行き、簑笠を手向けて弔って欲しいと僧に頼みます。突然の依頼に僧は驚き、弔うことは簡単な事だが、何の拠り所もなくその妻子と会っても信じてはくれないだろうと返答します。すると老人は、これを証拠にといい、着ていた着物の片袖をほどいて渡し、消え失せます。僧は外の浜に着き、猟師の妻子の家を訪ねます。不思議にも、その家にあった猟師の着物には片袖がなく、僧の持参した袖がぴったりと合いました。簑笠を手向け、僧が猟師を弔っていると、猟師の亡霊が現れます。亡霊は我が子に触れようとするが、罪障ゆえに叶いません。そして殺した雛鳥の親の気持ちを推し量って悔恨の念を述べます。亡霊は、生前に殺生を楽しみとしていたことを懺悔し、烏頭を捕る様子を再現して見せます。そして、地獄で化鳥に変じた烏頭から、責め苦を与えられる様子を見せ、僧に助けを訴えて、消え失せていきます。

曲名の烏頭とは、鳥の名前です。親鳥が「うとう」と鳴くと、雛鳥が「やすかた」と答えるといわれます。シテである猟師は、この性質を利用して、鳴きまねで烏頭を捕獲する猟を行っていました。生きるために他の命を奪い去らねばならない人間の悲哀ではありますが、残酷な猟で夥しい殺生を行ったことが、罪とされ地獄へ堕ちる事になりました。